

2007年以降、日本の人口(2006年推定1億2,774万人)は減少期に入り、2020年代後半からは毎年70万人ずつ、即ち、現在の静岡市や熊本市に匹敵する人口が減ると予想されています。片や高齢化は進み、世界一の長寿(平均寿命82歳)を手放しでは喜べない状況とも言われています。

或る研究によると、700年前の鎌倉末頃の平均寿命は現在の半分程度しかなく、これは一部のアフリカ諸国(35~40歳前後)やアフガニスタン(42歳)と同じくらいです。時代は異なりますが、それくらい寿命が短いということであれば、死というものは切実で身近な問題となるでしょう。当然のことながら、生きることの意味とか尊さ、つまり人々の死生観や宗教観といったものは、現在の日本人と比べると大きく異なっているのではないのでしょうか。

さて、その700年前ですが、日本は動乱の時代を迎えていました。モンゴル軍の侵入・襲撃→鎌倉幕府の滅亡→天皇家が分裂(両統迭立)→南北朝に分裂→室町幕府の成立へと至った時です。

『徒然草』で有名な^{つれづれぐさ}ト部(吉田)兼好(1283~1350)は、まさにそうした時代を生きた人です。日本史上でも屈指の随筆家(他には清少納言と鴨長明)であり、また歌人としても有名です。

兼好は無常観を詠った「遁世者」と呼ばれ、『徒然草』によって思想などは広く知られています。とはいえ、よく読まれるようになるのは江戸時代以降で、松永貞徳や細川幽斎が著書で取上げることがきっかけです。つまり、兼好が活着している間には『徒然草』も注目されなかったわけです。因みに、現在に伝わる最古の写本は、室町期の歌人・正徹が100年後に記したものだそうです。これは、兼好の社会的地位が低かったこと、および隠遁後に著したことが要因と思われるが、歌人としての活躍もしていましたから、訪ねて来る歌仲間だけに伝わったのかも知れません。なお、江戸期以降に注目された要因としては、印刷出版が盛んになったことも挙げられます。

つれづれなるままに、日ぐらし^{すずり}硯にむかひて、心にうつりゆくよしなしごとを、
そこはかたなく書きつくれば、あやしうこそ物ぐるほしけれ。(序段)

実に有名な文章ですが、「とりとめの無いことを書き留める」というのは、兼好の本意ではないとする声もあります。すなわち、実際には大切だと思ふことを忘れずに書き留めるのが目的で、彼の生き方は全くの世捨て人ではないと見るわけです。事実、兼好は世俗のことに非常な関心を払っています。よく比較される鴨長明『方丈記』は、『徒然草』の100年ほど前に成立したもので、無常観に満ちているという印象を受けます。しかし、一方の兼好は、無常観を詠ってはいても、そこで終わらずに、「変化する日常生活こそ面白い」と、むしろ楽しみを見出しているのです。

あだし野の露消ゆる時なく、鳥部山の煙立ちさらでのみ住み果つる習ひならましかば、
いかに物のあはれもなからむ。世は定めなきこそいみじけれ。……(第7段)

「世は定めなきこそ、いみじけれ」……「人の命も棲家も終わりがあからこそ、いとおしく、だからこそ、今を生きようとするのだ」とする姿勢からは、肯定的に生きる強さが感じられます。鴨長明が越えられなかった限界を、兼好は解消(突破)し得たと評価される所以でもあります。

兼好は吉田神社の神主の家系の子でト部一族の庶流でした。中下級クラスの宮廷役人を兼ねた神官でありましたが、家格が低いために大きな出世は望めなかったのです。そして30歳前後で^{しゃみ}沙弥(寺や宗派に帰属しない在家僧侶)として出家し、一時は鎌倉など関東の旅を経験しました。その後、叡山ほか京都周辺で生活を始め、晩年になって『徒然草』の執筆に入ったようです。

花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものかは。
 雨にむかひて月を恋ひ、垂れこめて春の行方知らぬも、なほあはれに情深し。
 咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ、見所多けれ。 (第137段)

「花は満開の時だけを、月は陰りの無い時ばかりを（最上のものとして）見るものであろうか。雨の降っている空を眺めては月のことを思い、病気で部屋に引き籠っていて、春の過ぎたことを知らないというのも、やはり、しみじみと情趣が深いものである。咲き始めたばかりの梢とか、花の散りしおれている庭などの方が、よほど見所が多いのである。」

何をもって美しいと感じるかということになりますと、これはおそらく千差万別でしょうね。何と言っても満開の花だ、満月だ、というのも自然なことであり、多くの方はそれを尊びます。兼好が述べようとしたのは、月や花というものは、いろいろな様相を見せてくれるものだから、その始まりから終わりまで、どうせならとことん味わってみようではないか、ということです。満開の桜や澄んだ夜空の月は格別だけれども、それだけではないですねと問うているのです。

このように、兼好は時間(の経過)というものを強く意識しています。花であれば、少なくとも蕾が付き始めてから花が散り終わるまでを、月であれば一ヶ月間の満ち欠けを見ているのです。それは、人に例えれば、生れてから死ぬまでの一生と重なるのでありまして、生死の問題としてとらえているわけですね。活力に満ちた青年期などは確かに素晴らしい、まぶしいほどである。しかし、幼年期でも老年期でも、人はその時々を懸命に生きているのであって、決して青年期に見劣りするようなものではないのではないかと、兼好が時間軸で見るのはその意味でしょう。

雪・月・花というのは和歌に詠み込まれる代表的な対象です。第137段はそのことが十分に意識された批評です。ですから、「とりとめも無く、役にも立たないことを書き留める」ものとは違うようですし、体裁は無くても、これはもう立派な「和歌論」ではないでしょうか。

精神的な味わいが濃いものの、いたずらに観念的には流れず、実生活の中から得られる事象を丁寧に見詰めている感じですね。とても冷静で、対象物とは上手く距離を保っているようです。微視的であって巨視的、愛着は深いが耽溺しない、いわば達人のような大人の姿勢でしょうか。平たく申しますと、妙に力んだところが無く、まことに淡々とした態度で臨んでいます。

余談ながら、こうした姿勢を感じる作家が、つい最近まで居られましたね。誰だと思えます？ その方は故・司馬遼太郎氏(平成8・1996年没)です。彼は無常観を描いた作家ではありませんが、小説はもちろん、エッセイにも優れたものが多い。登場する国・民族・人物を見詰める眼差しは優しく、愛着が強い一方で、対象とは距離を置き、決してのめり込みはしていないようです。

文語体の迫力や格調も『徒然草』の特徴です。「見るものかは」という箇所は、問いかけ・否定・詠嘆といったものを、実に端的に、凝縮して表現できています。同じ文章を口語体で意識すると、独特のリズム感とか歯切れの良さなどが失せてしまって、非常にまどろっこしく感じられます。『声に出して読みたい日本語』という本がありますが、まさに指摘する通りで、このような文章は目で追って読むだけでは物足りません。やはり、声を発して詠むことで味わいもひとしおです。思い付きですが、小倉百人一首のような“つれづれカルタ”があれば面白いでしょうね。

友とするにわろき者七つあり。一つには高くやんごとなき人、二つには若き人、三つには病なく身強き人、四つには酒を好む人、五つには猛く勇める兵、六つには虚言する人、七つには欲深き人。よき友三つあり。一つには物くるる人、二つにはくすし医師、三つには智慧ある友。

(第117段)

悪き友というのは、「弱者の心の痛みを知らない人、分からない人」を指し、安らかな心境では付き合えないという意味です。また良き友の方では、思わず破顔一笑するものも含まれますが、人間にとっては本質的な利己主義を肯定し、道徳的な見方で排除することをしていませんね。

この段は『論語』の中の、「益する者三友、損する者三友。直なおきを友とし、諒まことを友とし、多聞たもんを友とするは、益なり、便辟べんえきを友とし、善柔ぜんじゅうを友とし、便佞べんもうを友とするは、損なり」という教えを意識したものでしょう。意味するところは、「正直・誠意・博識」である友を大切に、「心がねじけた・軟弱・口先だけ」の友は遠ざけよ、ということです。逆に言えば、遠ざけられるような人間にはなるな、相手にされなくなりますよという教えでもあります。

『論語』と比べますと、兼好の友人論は非常に現実的・实际的と思えるのですが、『論語』同様に内容が示唆に富むことから、『徒然草』は“日本の論語”と呼ばれることもあります。

また、この段を始め『徒然草』には、**仏教・儒教・老荘思想などを取り込んだ教訓**のような話が数多く見られます。その一方、神道関係のものは、ほとんど見られないということです。当時は新仏教(浄土宗・浄土真宗・時宗・臨済宗・曹洞宗・日蓮宗)が隆盛を誇っており、神道は片隅に追い遣られていたような時代でしたが、兼好自身が見切りをつけていたのかも知れません。

八つになりし年、父に問ひていはく、「仏はいかなる物にか候ふらん」といふ。
父がいはく、「仏には人のなりたるなり」と。また問ふ、「人は何として仏になり候ふやらん」と。
父また、「仏の教へによりてなるなり」と答ふ。また問ふ、「教へ候ひける仏をば、なにが教へ候ひける」と。また答ふ、「それもまた、さきの仏の教へによりてなり給ふなり」と。
また問ふ、「その教へ始め候ひける第一の仏は、いかなる仏にか候ひける」といふ時、
父、「空よりや降りけん、土よりや湧きけん」と言ひて笑ふ。
「問ひ詰められてえ答へずなり侍りつ」と、諸人に語りて興じき。(第243段)

『徒然草』の最終段で、兼好が8歳の時、父と交わした問答(仏とは何者か)を回想した内容です。年少の兼好が容易に納得せず、質問を浴びせたので、最後には父が音を上げてしまったようです。しかし父は、その事を周囲の人に自慢げに語って喜んだわけで、実に微笑ましい場面ですね。

それにしても、この段を何故最後としたのでしょうか？ 結論の出ない問答で終わることは、これも兼好の意図だと思います。おそらく、多くのことを述べて来たが、いくら理屈で考えても容易に結論の出ないことが多いのが世の常だし、人の一生も簡単に評価はできないものなのだと言いたかったのではないのでしょうか。仏問答は一つの譬え話であろうと思われます。

このように、『徒然草』は全部で243段から成りますが、巧みに編集された構成で出来ており、決して「思いつくままに書いた」ものには見えないのです。内容的にも、お堅い話ばかりでなく、兼好の人間性(人柄・趣味・思想)というものが鮮やかに伝わって来るようです。